

地域みらい共創事業

伝統ある地域産業の発展へ



京都本店前にて撮影。
右から
山田社長、
甲賀支店長、
高橋支店長代理(銀行担当者)。

京都の東山に店を構える「京甘味 文の助茶屋」。明治42年(1909年)の創業以来、看板商品の甘酒とわらび餅を中心に100年以上にわたり伝統の味を守り続けている。しかし、コロナ禍による観光客減少で大きな影響を受けた。伝統と革新のバランスを取りながら、未来へ向けて歩み続ける老舗の姿勢を、京都銀行東山支店(現・京都駅前支店)甲賀大志支店長が、文の助茶屋・山田裕久社長に伺った。

創業者・桂文之助氏について

甲賀 文の助茶屋の創業についてお聞かせください。
山田 当店は明治末期の1909年に、上方の落語家で私の曾祖父にあたる二代目桂文之助によって創業されました。文之助は落語家を引退する際、高台寺近くに引越します。その境内にあった茶屋を継承したのが、創業のきっかけです。高台寺にある石碑にも「桂文之助甘酒屋」と残っており、「文之助さんの茶屋」と呼ばれ親しまれ、その後「文の助茶屋」と名乗るようになります。現在の場所には、1999年に移転しました。
甲賀 曾祖父から続く家業を引き継がれたということですが、経営を引き継ぐことは元から考えておられましたか。
山田 いえ、小さい頃から工作や絵画を描くのが好きで高校のときはファッションデザイナーになりたいと考えていたのです。当時は店の奥が自宅だったので、小さい頃は襖の隙間から店の様子を見ることや、レジ打ち、商品の包装を手伝うことはしていました。

伝統と革新

ね。ただ、私が高校生のときに祖父が、大学入学間もない頃に父が亡くなったこともあり、継ごうかと考えました。
しかし、すぐには家業を継がず、大学に入学し在学中に海外短期留学へ。そこで海外の人に京都が意外と知られていないことがわかりました。大学卒業後は東京の百貨店に勤務していたのですが、ここで、あらためて京都の良さを知ることになりました。
甲賀 家業ではないところで社会経験をされてから入社されたということですが、伝統ある家業を継がれるときに気をつけたことはありますか。
山田 「伝統」と「革新」のバランスです。祖父はコーヒー好きの人でした。ですが、「うちのよう茶屋ではコーヒーを売ってはいけない」というように伝統を重んじようとする部分がありました。ただ私は、伝統を守りながらも必要ですし、革新することも大切だと感じています。ちなみに私の代になってから、



旧パッケージデザイン



新パッケージデザイン
「京甘味 文の助茶屋」の「わらび餅」ギフトセット。パッケージのデザインを、2018年に変更した。



「京甘味 文の助茶屋」の店頭にある席。春秋シーズンには、京都らしさを感じられる。

コーヒートの販売を始めました。
甲賀 革新の部分で、何かエピソードはありますか。
山田 2010年頃でしょうか、革新をしようと我流でパッケージのデザインを変えました。でも、全然うまくいかずに大量の不良在庫が……。日頃、経営に口出ししない会長(社長の母)にもさすがに怒られたのを覚えています。

甲賀 しかし、コロナ禍対策で、パッケージの変更もされましたよね。どういう経緯でしょうか。
山田 コロナ禍前の2018年のことです。創業100年の時期に祖父が変えていなかったパッケージもあり、前回の失敗も踏まえつつデザイン関係の仕事をしている高校からの友人に相談をして、ロゴやパッケージのデザイン変更を

行いました。一度失敗している中で、どちらかというところ革新より伝統を重んじようと考えていたのですが、その友人が最終的に背中を押してくれ、伝統をベースにした革新をしました。

次の革新のきっかけを

甲賀 それは大きな変化ですね。伝統の中に革新を取り入れたわけですね。
山田 昨年、本店の未活用スペースを改装し、14席しかなかったカフェスペースを36席に、そしてカフェメニューだけでなく、ランチメニューも増やしました。お客さまのニーズや時代の変化を敏感に捉え、柔軟に対応することで、次の時代につなげることができると

地域みらい共創事業について —ともに未来を創りたい—

京都フィナンシャルグループでは、地域産業を担う歴史・伝統・技術を有する事業者が未来のためのイノベーションを展開できるように、グループが持つ総合ソリューションを駆使して、課題解決を行っていく「地域みらい共創事業」に取り組んでおります。

京都フィナンシャルグループは、地域とお客さまとともに成長してまいります。

取材後記

現在は終日、観光客の多い東山界隈ですが、コロナ禍では閑散としていたそうです。

業歴100年を超える文の助茶屋でも例に漏れず、店舗での飲食・物販が中心であった売上は大打撃を受けたそうです。

一方で、伝統よりも革新に比重を置ききっかけにもなったようで、山田社長が注力されたパッケージの変更以外にも社内の見直しとして、細やかな部門別の採算管理や製造設備の配置転換による生産効率の改善など「昔からそうだった」という決まりを変えて、コロナ禍を乗り越えてこられたそうです。